

一葉の墓

泉鏡花作

全一章

門前に焼團子賣る茶店も淋しう、川の水も靜に、
夏は葉柳の茂れる中に、俤、時としては馬車の差置
かれたるも、此處ばかりは物寂びたり。櫛線香など
商ふ家なる、若き女房の姿美しきも、思なしかあは
れなり。

或時は藤の花盛たりき。或時は墓に淡雪かゝれり。
然る折は汲み來る闕伽桶の手向の水も見る／＼凍る
かとぞ身に沁むなる、亡き樋口一葉が墓は築地本願
寺にあり。

彼處のあたりに、次手あるより／＼に、予行きて詣
づることあり。

寺號多く、寺々に附屬の卵塔場少なからざれば、
はじめて行きし時は、寺内なる直參堂といふにて聞
きぬ。同一心にて、又異なる墓たづぬるも多しと覺し

く、其の直參堂には、肩衣かけたる翁、頭も刷立の
うら少き僧、白木の机に相對して帳面を控へ居り、
訪ふ人には教へくる。

花屋もまた持場ありと見ゆ。直參堂附屬の墓に詣
づるものゝ支度するは、裏門を出で、右手の方、墓
地に赴く細道の角たる店なり。藤の棚庭にあり。聲
懸くれば女房立出で、いかなるをと問ふ。桶には
さゝやかなると、稍葉の密かなると區別して並べ置
く、なかんづく其の大なるをとて求むるも、あはれ、
亡き人の為には何かせむ。

線香をとにも買ひ、此處にて口火を點じたり。兩
の手に提げて出づれば、素跣足の小童、遠くより認
めてちよこ／＼と駈け來り、前に立ちて案内しつゝ、
やがて淺き井戸の水を汲み來る。

さて、小さき手して、かひ／＼しく碑を清め、花立
を洗ひ、臺石に灌ぎ果つ。冬といはず春といはず、
其も此も密の葉残らず乾びて、横に倒れ、斜になり、
仰向けにしをれて見る影もあらず、月夜に葛の葉の

裏見る心地す。

目立たざる碑に、先祖代々と正面に記して、横に、
智相院釋妙葉と刻みたるが、亡き人の其の名なりと
ぞ。

唯視たるのみ、別にいふべき言葉もなし。さりた
がら青苔の下に靈なきにしもあらずと覺ゆ。餘りは
かなげなれば、ふり返る彼方の墓に、美しき小提灯
の灯したるが供へありて、其時薄暗かりしかなたに、
蠟燭のまたゝく見えて、見好げなれば、いざ然るも
のあらぼとて、此の邊に賣る家ありやと、傍なる小
童に尋ねしに、無し、あれなるは特に下町邊の者の
何處よりか持て來りて、手向けて、今しがた歸りし、
と謂ひぬ。

去年の秋のはじめなりき。記すもよしなき事かな、
漫歩きのすさみなるを。

【完】